

子ども同士のいざこざへの介入についての一考察 —ベテラン保育者と新人保育者の言葉かけの違い—

○栗原ひとみ（植草学園大学）

佐々木宏之（新潟国際情報大学）

キーワード：保育者、言葉かけ、発話スキル

問題と目的

筆者らはこれまで子どもの行動を引き出す保育士の言葉かけに注目し、行動の目標によって保育者が言葉かけの表現を変えること（佐々木・栗原 2016）、提案・勧誘・確認・指示などの手法を駆使して子どもの主体性を育んでいること（佐々木・栗原 2017）を見出してきた。

本報告では子ども同士のいざこざ場面での言葉かけを取り上げる。子ども同士のいざこざへの介入にはベテラン保育者と新人保育者ではかける言葉が異なるのではないかと感じている。いざこざ場面は自己主張が拮抗する人間関係上重要な場面であり、この場面の言葉かけがベテラン保育者と新人ではどのように異なるのか比較することから、ベテラン保育者の発話スキルを明らかにする。

方 法

観察日：2015 年 2 月 16 日午前 9 時～12 時

記録方法：ビデオによる音声と映像の記録採取

分析の方法：ベテランと新人の音声と映像から逐語録を作成し、発話を切片化し分析した。

結果と考察

新人保育者の傾向と対比させて、ベテラン保育者の傾向を分析したところ、下表の左の列に記したベテラン保育者が持っている発話スキルが明らかになった。

結 語

ベテラン保育者の発話スキルには、短局的確な発話で、中立的な参加者の役割を果たすなど、新人保育者とは異なる発話スキルが明らかになった。特に子ども同士を繋ぐ役目を果たす、いざこざ場面では原因のみならずそこに至った経緯や子ども理解、発達理解等いざこざの背景までも射程に入れていた。また間合いが随時取られており、子ども自身に考えさせる為の設定が用意されていた。この間合いは思考力を育む機会になると考えられる。

ベテラン保育者の発話スキル	ベテラン保育者の傾向	新人保育者の傾向
中立的な参加者の役割を果たす	当事者と一緒になって、模索する参加者	裁定者、事実やルール・規範を伝える役割
～子どもと同じ立場でいざこざに参加し、当事者の子ども同士のやり取りを促進する～	子ども同士を繋ぎ合うために動く 結論づけない・子どもたちに最後は任せる 問いかけへの子どもの反応を待つ。	解決に向けて自ら動いて子どもを促す 結論づけて共通理解へ導く 問いかけながら自ら事態を收拾する。
いざこざの全体像を視野に入れる	真意への問いかけがある。「どうしたいの？」 「どうして見ていたいの？」	出ている情報を整理する
～事態の解決のみならず事態に至った経緯や子ども理解等総合的な視点をもって対応する～	事態の原因にも背景にも言及する 発話語尾に限らず、子どもの内面に共感している	事態の原因に言及するが背景には言及しない 発話語尾を繰り返す
状況に応じた非指示的リードを行う	一緒に事態に身を委ねる。「困ったね」「どうしよう」	1 問 1 答のやり取り
～子どもと一緒に事態に身を委ねながら方向性を示す～	随時、短い言葉でやり取りを押さえる。「うん」「待って」「はい」「う～ん」「そっか～」 展開を引き出す言葉かけをする。「どうなった？」「それから～？」「続けて」 本人が言えるか見極めてから、言えない場合は代弁する。代弁を急がない。	善悪の判断を伝えたり、規範・ルールを伝える 事態を解決に向かわせる。「言ってみよう」「だったらこうする？」 泣いたり、訴えていたりしている子の気持ちを先に代弁する
子どもと同じ発話（言葉かけ）の長さにする	1 文が短い。キーワードとなる 3 語程度で構成されている	1 文が長い。1 文に質問や意見が入り混じる
～短局的確に、子どもの理解できる語彙を使う～	子どもの応えを受け止める言葉が言語化される やり取りの間に子どもに考えさせる間が入る。「どうしよう」	子どもの応えに非言語で処理して次の質問を繰り返す やり取りのテンポがいい
状況を変える為に第三者に発話を促す	第三者の介入を受止める。時には促す。「〇くんはみていてどうだった？」	第三者の介入については積極的とは見えず、自分と当事者間で解決しようとする
～集団を育てる意識がある～		